

コラム 『アレクサンドロス』の東征と左右のベクトル

■世界地図

元「ローマ」でもあり、今は歴史漫画を多く手がけている安藤良和の作品のひとつに、アレクサンドロス大王の東方遠征をモチーフにした『アレクサンドロスと世界帝国への夢』がある。

この作品のカバーに用いられている装画は「アレクサンドロス・モザイク」を安藤がアレンジして描いたものだが、「右へーシ参照」、このモザイク画の大王は興味深いこと、「右」に向かって進行して

おもしろいのは、「右」を「東方」になぞらえた構図なのだろう。「北」を上にした地図を見慣れている文化であり、「大王が遠征したのは右方向だった」というイメージが浮かびやすいはずだ【図37】。現代の日本人が関ヶ原の合戦を絵にしようとしたら、西軍を左に、東軍を右にした構図をまず思い浮かぶものなのだろう。

『アレクサンドロス』はその本編において「西方」や「ギリシア世界」⇨左、「東方」(アジア世界) ⇨右」という構図を守りながら作画されている【図38】。

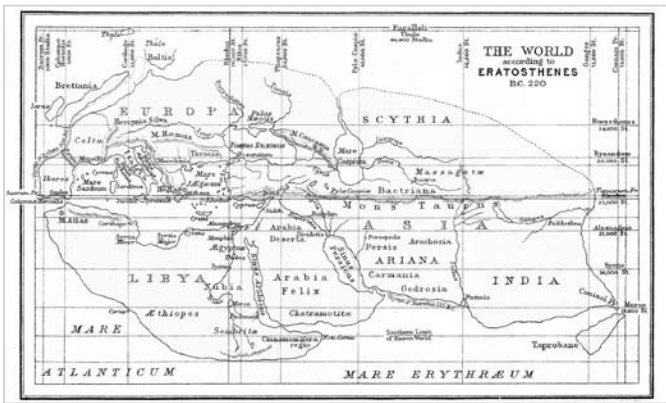


図 37 エラトステネスの世界図（復元図）

古代エジプトのギリシア人学者、エラトステネスによる世界地図（紀元前 220 年時点）。左にヨーロッパ、右にアジアという位置関係で方位が定められている。一番右下の「Taprobane」と記されている島が、今でいうスリランカのセイロン島。インド以東の地理的な知識は、大王の遠征がギリシア世界にもたらしたものであり、それまで世界はもっと狭い大陸だとギリシア人たちは考えていた。

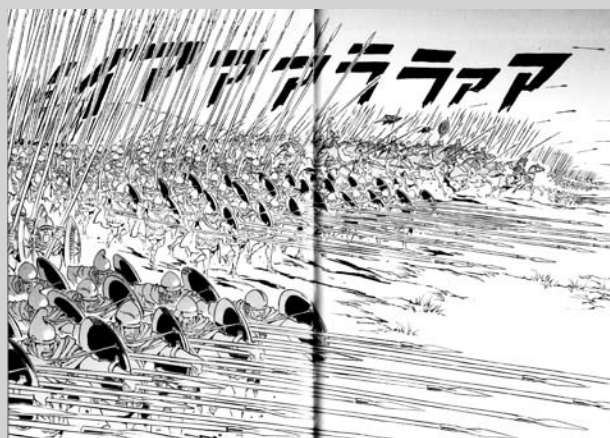


図 38 『完全版 アレクサンドロス』

右上：戦場のアレクサンドロス大王。左側から逆流の向きで戦う（p65）。

左上段：「イッソスの会戦」における大王軍の突撃。これも逆流のベクトル（p90-91）。ちなみに《アアララアアア！》という関の声は、右から左の順に書かれている。

左中段：「ガウガメラの会戦」の図。戦象の混じったダレイオス軍が右側、対する大王軍が左側に位置する（p118-119）。

左下段：西インドにおけるボロス王との会戦の図。戦象を従えたボロス軍がやはり「右側・順流」となり、対する大王軍が「左側・逆流」となる（p216-217）。力強いインドの軍隊のイメージ。



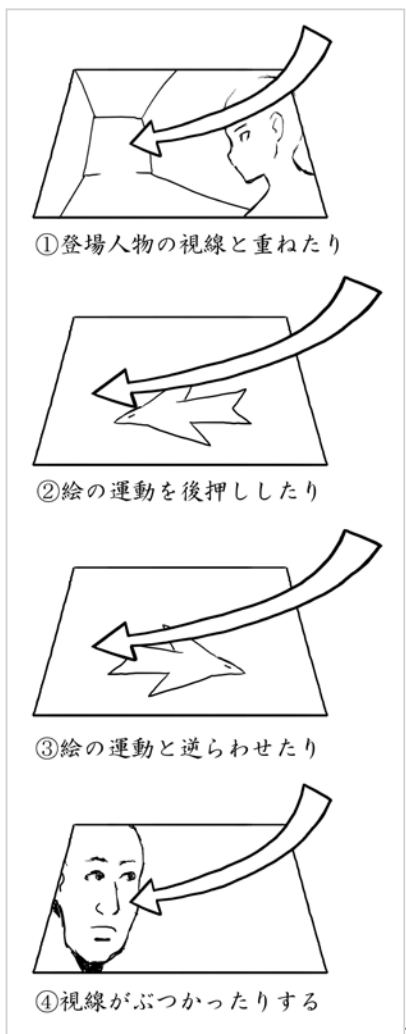


図 39 視線の力学のおおまかな効果

■下ラママに応じて流れるベクトル

「視線の力学」によって、読者のアンクルが左へと差し込み、まるで風圧のようには、「見えない水流」とも呼べるような力が

働いていく。この「視線の力学」は、漫画の「視線の力学」が映像作品として制作されてきたとしても、方向的なわかりやすさを重視して、おそろしく同じ構図が繰り返されてきた。

だが同じ構図が繰り返されて、絵面やコマには無さず、特別な意味「が」必ず漫画には存在するのだ……。左右の向きや位置の違いによって、コマの「視線の力学」が、読者の視線の力学として、漫画の文法として、

ページの上下を流れていく。そして、漫画に描かれた絵は、一種類の方向性を持つていく。

「視線が流れて」左向きベクトルを言った、順流のもの。

「視線がぶつかると」右向きベクトルを言った、逆流のもの。

おおまかに図解すれば、図 39 のような効果が常に生み出されていくことになる。

その上で、『アレクサンドロス』における大王の東征遠征は、右を向いた「逆流」で描かれていく。これは何を意味するかが、

それは一言で言えば、大王の進軍が「自然な流りに沿っていく」辛く激しい戦闘を繰り返して、そしていつか祖国「戻る行動」である「このイメージ」を「読む」感じさせやすい構図だったことだ。